**分野別②共通演習「障害者虐待対応における管理者及び従事者の役割」事例**

【利用者】

有明のぼるさん（21歳）療育手帳A（重度）・知的障害・自閉的傾向・障害程度区分４

身長172cm、体重80kg。特別支援学校高等部を卒業後、生活介護事業の事業所に自宅から母親の送迎により通所している。

【家庭での様子】

本人の意に沿わないことが少なくなるように家族が考えて生活をしている。

自分の部屋にはテレビとCDプレーヤー、冷蔵庫がある。テレビでは幼少期にみていたアニメや幼児番組を繰り返しみている。昔VHSでとったものをCD-Rに焼き直してもらった。音楽CDは、幼少期に聞いていた童謡が入ったCDをきく。また、自分の部屋では裸で過ごしている。部屋で自分のペースで過ごしているときには大変落ち着いていて、表情も柔らかい。日課は決めて過ごしている。

同居の家族は、父、母、妹の4人。

【事業所での様子】

家から、パジャマのスウェットのまま通所。家人が着替えを促しても応じず、朝食もとらず、母親が送ってくる車のなかでこんにゃくゼリーを一袋食べながら通所。事業所に着いてから、着替えをする。

昼ご飯は、事業所で提供するがほとんど手をつけず、食べるように促すと職員を脅すように大声を出してくる。（ほかの利用者が不穏になるため、それ以上食べるようには求められない）

事業所内での活動は、散歩、軽作業が主となる。散歩も、前日寝不足だと不機嫌で歩こうとせず。それでも促すと、その場で座り込む、靴ぞこをずって歩き、1週間で穴を開けてしまう。気分がよい日には、先頭に立って歩き、笑顔もみられ、散歩は本人の好む活動でもある。軽作業は、牛乳パックを使った紙すきをする班に属している。担当する作業は、牛乳パックのラミネートされたビニール部分をはがすこと。気持ちが作業に向くと、集中して洗面器１つ分の作業ができる。（通所当初は、３～４枚はがすと誘ってもやろうとしなかったが）

【のぼるさんがいる事業所の中のグループの体制】

利用者　20名

職員　A主任（グループ責任者）男性（8年目）：サービス管理責任者。職員の育成に力を入れていきたいと考えている。

　　　B副主任　女性（6年目）：育休明けで、子どもの発熱などで早退が多い。

　　　　　　　副主任としての役割を果たせていないと思っている。しかし、残業もできず新人教育も十分できずジレンマを感じている。

　　　C支援員　男性（3年目）：A主任から新人の教育をするように言われ、張り切って仕事に取り組んでいる。B副主任より自分の方が仕事をやっていると思っている。

日頃から、のぼるさんの対応には苦慮している。のぼるさんは、家で甘やかされていたから、事業所での日課に対応できないのではないかと思い、事業所ではのぼるさんにわかってもらうために厳しく接することが必要であると考えている。

　　　D支援員　女性（4月から勤務）：福祉系の大学を卒業して、入職。まだ、自分がどのように利用者と関わったらよいのかがわからず、とまどいの連続。のぼるさんには、声をかけても全くきいてもらえず、どうしたらよいのかわからない。しかし、C支援員ののぼるさんへの対応のように、威圧的にかかわったり、暴れそうになると足払いをかけたりする対応には疑問を感じている。このところ、出勤するのがつらい日がある。

【出来事】

　ある日、午前の作業時間になって活動を促すが、牛乳パックを一枚手に取ったまま動かず、時間がきて終了となる。その時間の担当職員B副主任は、作業をすすめるように再三声をかけるが、うるさそうに横を向いたり、座ったまま床をどんどんと足で踏みならしたりしていた。その後、昼食となるが全く手をつけようとしない。

　そこで、午後は散歩に行く予定にしていたが、本人には「作業をしていないから今日は散歩に連れて行かない」と告げ、C支援員と二人で作業室に残り、午前やらなかった作業をすることになった。しかし、のぼるさんは散歩に行けると思っていたため、大きな声をだしたり、床を足でどんどんと踏みならしたりしていた。作業をするように促すが、やろうとせず、いすから滑り落ちて床にしゃがみ込んでしまう。C支援員が、本人の腕をつかみ立たせようとしたら、C支援員の手を振り払い、作業室から逃げだそうとしたため、とっさに足払いをかけ、のぼるさんは転倒。床に顔面から倒れ、額を打ち付け大きなこぶができた。

　そのとき、D支援員は散歩の途中で気分の悪くなった利用者と一足先に園に戻ってきて、作業室をのぞいたところ、C支援員がのぼるさんを足払いしているところをたまたま見てしまった。そのときD支援員は、声をかけられずその場からすぐに去ってしまった。C支援員もD支援員が見ていたことに気づいていなかった。

【その後の対応】

　その後、C支援員はD支援員に、「のぼるが逃げだそうとしたから、逃げ出せないようにしたら、勝手に転んだんだよなあ」と話していたが、A主任や施設長への報告や家族への連絡では、「いすから慌てて立ち上がり、自分で転んだ」と言っている。

　D支援員は、悩んだ末にA主任に自分のみたC支援員の行動を報告する。事実確認が必要ではあるが、D支援員の報告が本当であれば虐待の可能性があると考え、施設長に報告をした。